

高橋紹運墓所の石碑のお話

高橋紹運は忠義の戦国武将として人気の高い人物ですが、その墓は岩屋城二の丸跡にあります。大人の胸の高さほどの石垣に囲まれた墓所は気持ちよく整備され、中央に盛り土をした紹運の墓、その後景には岩屋城合戦で共に果てた家臣たちの墓石が並びます。この墓所内には現在3基の石碑がありますが、ここではその中の一つ、「侍従武官御差遣記念碑」を取り上げます。

筑紫史談会の創設者、武谷水城を中心とする高橋紹運公三五〇年奉賛会は、紹運没後350年にあたる昭和10（1935）年、紹運墓所へ顕彰碑の設置を計画します。この時建碑の理由として持ち出されたのが、大正5（1916）年の陸軍特別大演習の際

に行われた、該地への侍従武官の派遣でした。当時墓所には「侍従武官手植えの松」があり、その松の横に記念碑を建てる、という案です。水城村長竹森善太郎が県に宛てた「碑表建設願」には、案の詳細が図面入りで記されています。そこには、碑文と奉賛会の人名を浮き出し文字で青銅板に載せ、それを碑石にはめ込む、という凝った作りのものが描かれています。碑を構成する竿石と礎石は、工事明細書による

と「字四王寺ヨリ運搬」とあり、ルートは定かではありませんが、お隣の宇美町から運ばれるものだったようです。

実は、この建碑をめぐる武谷水城言うところの「厄難」がありました。墓所で執り行われた紹運350年祭に対し、該地の所有権を主張する者から「無断改廃」の物言いがついたのです。碑文に「侍従武官御差遣」の件を採用したのは、奉賛会に正当性を与えるための策でしたが、争いは勅使派遣の真偽や「不敬」の議論に発展し、法廷にまで持ち込まれます。お互い告訴を取り下げることで落着はしますが、おかげで昭和10年中に予定していた建碑は同13年にずれ込みました。

ところで、現在墓所には文字を石に直接鑿ったタイプの石碑が建っています。当初計画していた「銅板浮字」の壮麗な碑面がまぼろしとなったのは工事の遅れの影響でしょうか。しかしこの頃は戦争が長期化の様相をおびてきた時期。もし実現していれば、銅板はほどなくして供出の憂き目にあっていたことでしょう。

